

『パリ ポンピドゥーセンター キュビズム 美の革命』展を観る 2023年11月30日 虎長

来年1月28日まで国立西洋美術館で開催の本展を11月20日に訪れた。月曜日は本来休館だが、主催者の一つ日本経済新聞社の「招待日」で、友人のF君が券を入手して誘ってくれた。多謝。ポンピドゥーセンターには1977年落成直後に行ったことがあるが、印象に残っているのは工事現場のような斬新な建物外観だけで、館内で何を観たのか記憶が残っていない。主要展示物である近現代美術は概して「とっつきにくい」からかもしれない。

キュビズムとは？ その始まり：ルネッサンス以降の絵画は現実の再現を常識とするので、「とっつきやすい」。その常識を覆すキュビズムは20世紀美術の出発点となった。1907年制作のピカソによる『女性の胸像』(Fig1)は1909年発表なので、1908年発表のブラックによる『レスタックの高架橋』(Fig2)がキュビズムの嚆矢とされている。これが「キューブ(立方体)」と評されたのが、「キュビズム」という名の始まりだそうだ。画面はむしろ平面的なのに、なぜか？ 遠近法・陰影法を用いずに、幾何学的な形を用い、多角度から同時に見たような画面構成を「キュビズム」と呼んだらしい。



Fig1

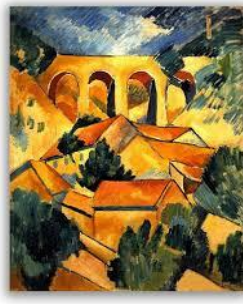


Fig2

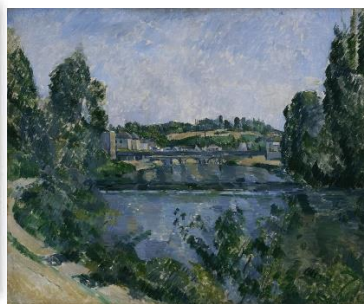


Fig3



Fig4

本展でセザンヌの作品が3点も展示されているのにちょっと驚いた。後期印象派の一人であるセザンヌだが、彼は自然の内にある幾何学的要素単純化することに関心を持ち、「円筒、球、円錐で自然を表現したい。たとえば木の幹は、円柱、りんご、オレンジの球で構成される」と話していることも本展のパネルで知った。セザンヌの『ポントワーズの橋とダム』(Fig3-1881)は、確かに自然の再現でなく創造的構築を目指しているという点が指摘されており、ブラックの『レスタックの高架橋』と見比べると、その影響が感じられる。オセアニア・アフリカの造形物の衝撃から生まれたピカソの『女性の胸像』の刺激が、ブラックに『大きな裸婦』(Fig4-1907~08)を描かせたそうだ。

サロン・キュビスト：ピカソとブラックはお互いに切磋琢磨してキュビズムを始めたが、それとは異なる流派がでてきた。ドローネー夫妻やレジェなどの、大衆を意識したサロン・キュビストたちである。ロベール・ドローネーの幅4メートルという大きな、『パリ市』(Fig5-1910~12)は本展の呼び物の一つで、写真を撮る参観者が多かった。余談ながら、日本の美術館は写真撮影を「原則禁止、一部許可」から欧州なみに「原則許可、一部禁止」に方針を変えてきたようだ。『パリ市』は万華鏡のような色彩が踊っている。ドローネー夫妻は色彩の「同時的」対比効果を追求した。ロベール・ドローネー『円形・太陽 no.2』(Fig6-1912~13)は抽象絵画的だ。クプカ『色面の構成』(Fig7-1910~12)は具象とも抽象とも見えるが、陰影のグラデーションが特徴。レジェ『婚礼』(Fig8-1911~12)は、想像以上に大きな絵だった。円筒形が多く描かれて「キュビズム」の名前にふさわしく思われるが、チュービス(土管屋)と揶揄されたという。



Fig 5



Fig 6



Fig 7

Fig 8

ドローネー、レジェ、M.デュシャンや、本展には展示のないピカビアのキュビズムは詩人アポリネールにより、「オルフェウスのキュビズム」と呼ばれた。オオルフェウスのとは「謎めいていて、うっとりする」という意味。ドローネーの輝く色彩のキュビズムを、くすんだ灰色や緑を主流とするピカソやブラックのキュビズムと区別した呼び方。

ピュトー派: ピュトーはアトリエの集まった地名で、前述のクプカとデュシャン兄弟、グリス、グレース、メッツアンジェに代表される。彼らはまた、みずからをセクション・ドール(黄金分割, Section d'Or)とも呼び、分析的キュビズム(対象を分解してから再構成するキュビズム)を「色彩を放棄した」として批判し、絵画としての豊かさを復活させようという考え方を持っていた。グリスは分割や理論に忠実で「ピュトー派」の中でも一線を画すとのこと。グリスの『ギター』(Fig 9 -1913)は、それを示している。グレースの『収穫物の脱穀』(Fig10-1912)は、収穫という伝統的画題であるが、複雑に入り組んだ幾何学的図形によって構成された典型的なキュビズムの作品。メッツアンジェの『自転車乗り』(Fig11-1911~12)は、写実からは得られない「動き」を感じさせる。その点で、有名な、但し本展での展示にはない、M.デュシャンの『階段を降りる裸体』を思い出させた。



Fig9



Fig10



Fig11

ラ・リュージュ(ミツバチの巣)派: 芸術家が屯した建物の形状から、ピカソやブラックの「洗濯船」という建物と対比して命名された。ルーマニアの農家出身のブランクーシの彫刻は細部をそぎ落とした、原始的ともいえる単純なもの。箱根の彫刻の森にある『接吻』(Fig 12-1908)が、その特徴を表している。ブランクーシ作品としては、『眠れるミューズ』(Fig13-1910)がむしろ本展の呼び物となっているようだ。ベラルーシ出身のシャガールも、ラ・リュージュ派の一人で、『婚礼』(Fig14-1911~12)がキュビズム的な幾何学空間を示している。シャガールの『キュビズムの風景』(Fig15-1919~20)の展示もあった。ずばりの画題だ。モディリアアーニも ラ・リュージュ派で石灰石の彫刻『女性の頭部』(Fig16-1912)の展示は彼の描く絵の顔と同じだ。



Fig12

Fig13

Fig 14

Fig15

Fig16

立体未来主義、第一次大戦時、キュビズム以後： 立体未来主義はロシア革命直前にロシア、ウクライナで展開された芸術運動で、フランスの分析的キュビズムとイタリアの未来派の芸術的要素を融合させた、と見なされている。本稿では絵画の引用を省略する。ピカソは第一次大戦後、保守的風潮に影響された。『輪を持つ少女』(Fig17-1919)は、キュビズム的な描き方の少女の背後の鏡が写実的で折衷的との見方もある。本展のブランチャールの『輪を持つ子ども』(Fig18-1917)を意識していると僕には思えた。



Fig17

Fig18

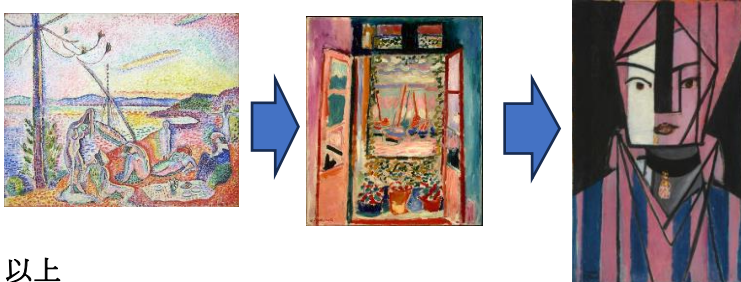
Fig19

Fig20

Fig21

僕が無知でキュービストとは思っていなかった人たちによる絵の展示： 日曜画家のアンリ・ルソー：『熱帯風景、オレンジの森の猿たち』(Fig19-1910)一点のみ展示。ピカソ、ブラック、アポリネールのたまり場だった建物「洗濯船」ではアンリ・ルソーを囲んだ会も開かれた、という。 **優雅な色彩、綺麗でかわいい絵のマリー・ローランサン：**「洗濯船」グループの一員で、ピカソ、ブラックの影響下、キュビズム画家として出発した。が『アポリネールとその友人たち』(Fig20-1909)一点のみ展示。恋人のアポリネールを中心に描いている。 **建築家のル・コルビジエ：** 元来画家志望で 1918～1923 は絵を描いていた。当初はキュビズムを「混乱した芸術」と批判したが、自ら推進していたピュリスム(純粋主義)が目指す「構築と総合」の精神が既にピカソ、ブラック、レジェらの作品に実現されていると悟り、彼らの多義的空間表現への理解と交流を深めていく。『静物』(Fig21-1922)は彼が設計した近代建築の室内に飾るのがふさわしいようだ。

一人の画家の変遷例： 本展に展示はなかったマチスが「点描」「フォービズム」「キュビズム」と変遷していった好例ということなので、以下に示す。他の画家では、このあと更に「抽象」へと進む例も多い。ピカソは点描もなく抽象もないとの点でむしろ例外とのこと。この項は山田五郎「おとなの教養講座」の受け売り。



マチスの例：左から
 点描：『豪奢、静寂、逸楽』
 フォービズム：『開いた窓、コリウール』
 キュビズム：『白とバラ色の頭部』

以上